

国際シンポジウム
「中央アジアにおけるスーフィズムとイスラーム」
参加報告

河原 弥生

2011年10月21日～22日に米国プリンストン大学 (Woodrow Wilson School, Robertson Hall) において、シンポジウム「中央アジアにおけるスーフィズムとイスラーム」 (Symposium on Sufism and Islam in Central Asia) が開催された。本シンポジウムのオーガナイザーは、Muhammad Qasim Zaman (Princeton University)、Michael Cook (Princeton University)、Devin DeWeese (Indiana University)、Jo-Ann Gross (College of New Jersey) の4氏で、プリンストン大学の近東研究学部 (Department & Program in Near Eastern Studies) が主催し、故 Leon B. Poullada 氏⁽¹⁾ の遺族からの寄付を受けて行われた。

2日間にわたった会議は、三つのセッションから構成され、11人が研究報告を行った。そのうち海外からは日本、オーストリア、カナダから4名が参加したのみで、中央アジアからの参加者は、客員研究員としてインディアナ大学に滞在中であった Muminov 氏 (カザフスタン) を除いて皆無であった。主催者は4名全員がディスカッサント等の役割を担っていた。その他の参加者は10～15人程度いたが、そのうち5人が Poullada 一族であり、残りはプリンストン大学の大学院生と見受けられた。報告時間は一人20分であり、セッションが終わる際にそのセッションの報告者全員が前に並んで質疑応答と議論が交わされた。各セッションのディスカッサント以外に、各日、両日の報告についてコメントを述べ、総合討論を司会する担当もそれぞれいた。以下、本シンポジウムの第二セッションに参加した筆者が簡単な報告を行いたい。

一日目は、主催者代表の Zaman 氏の挨拶に続き、主催者の一人、DeWeese 氏の基調講演で始まった。中央アジアのイスラーム研究において、18世紀以降のスーフィズムのありかたがいかに重要な位置を占めるかという問題提起がなされた。氏は、18世紀に起こった政

⁽¹⁾ Leon B. Poullada 氏 (1987年没) は在トーゴ米国大使を勤めた外交官であり、退職後、プリンストン大学でアフガニスタン政治史を専攻し、*Reform and Rebellion in Afghanistan, 1919-1929*; *King Amanullah's Failure to Modernize a Tribal Society* 等の著作がある。

治的变化と併せて、スーフィズムも大きく変容したことを指摘し、特にナクシュバンディエーヤが、ほかのスーフィー教団の系譜を取り入れ、かつてはナクシュバンディエーヤと他の教団との間の差異として問題となっていた点（ズィクルの方法の違いなど）が、ナクシュバンディエーヤ内部の問題に変わっていったことを例に挙げ、スーフィズムそのものの変容をとらえ直す必要を論じた。また同時に、参加者全員の紹介も行われ、それぞれの最近の研究についても紹介がなされたが、これは質疑応答や議論がスムーズに行われるための配慮であろう。

第1セッションは「史料と解釈の手段」と題され、スーフィズム関連の一次史料の解釈に関わる問題が議論された。Shahzad Bashir 氏の報告は、多様な中央アジアのスーフィー聖者伝をどのように分析すべきか、既存の研究によく見られるように聖者伝から史実を抽出することは適切な作業なのかといった、「聖者伝というジャンルの史料」の研究であった。避けては通れない根本的な問題であるが、他の報告者が特定の史料に基づいた研究を発表する中、会場からの反応は少なかった。

Jo-Ann Gross 氏の報告は、タジキスタンのパンジケント近郊の村に廟がある聖者ムハンマド・バシャーラーについて、一方は彼をイスラーム化に貢献した聖者とみなし、他方は彼をハディース学者とみなす二種の伝記に着目し、それを現代タジキスタンのイスラーム復興現象の文脈から読み解こうとするものであった。廟に対する建築学者の研究成果と史料に対する歴史学者の研究成果が異なることを指摘し、また歴史史料の分析と併せて聖者廟の現代的意義を探ろうとするなど、筆者には聖者、聖者廟研究としてとても刺激的な内容に感じられた。

Maria Subtelny 氏の報告は、16世紀初頭のヘラートで文筆活動を行ったフサイン・ヴァーイズ・カーシフィーの全作品を、同時期に大衆化したスーフィズム研究のための史料として分析する古典的な手法とも言えるものであった。

第2セッションは「スーフィー教団と史料：ロシア帝政期からポスト・ソヴィエト時代までの再編成」と題され、旧ソ連領中央アジアの各地域、各時代のスーフィズムを対象とした研究報告から構成された。

筆者は、コーカンド・ハーン国末期にマルギランにおいてロシア軍に対する「聖戦」を行ったワリー・ハーン・トラというスーフィーに着目し、当該地域において、彼の権威がどのようにして醸成され、立場が築かれたのか、またロシア帝国側がそれに対応したのかを分析した。会場からは清朝期東トルキスタンにおける同様の現象との比較の必要性などが指摘された。

Eren Tasar 氏の報告は、ソヴィエト時代とりわけ第二次世界大戦後の中央アジアのスーフ

イズムという目新しいテーマであった。質疑応答の際には、氏の研究に利用されたのがすべてソヴィエト時代のアルヒーフ史料であったことが批判的となり、そのような「強制された史料 (coerced sources)」とでも呼ぶべき史料にのみ基づいてソヴィエト時代の問題を論じる危険性が議論された。

Ashirbek Muminov 氏は、現代のカザフスタンで活動するスーフィー教団について報告を行った。現在活動する主要な四つのグループ（ソヴィエト時代を生き延びた地元のナクシュバンディーヤ・ムジャッディディーヤ・フサイニーヤおよびチェチェン人を経由する系譜を持つカーディリーヤ、ソ連崩壊後に到来したアフガニスタン由来のジャフリーヤおよびトルコ由来の諸教団）の実態、系譜、儀礼の実践が紹介され、政府との関係、教団間の競合、サラフィー主義者など復興主義者との対立、民間信仰との結びつきなどが分析された堅実な研究であった。

二日目の第三セッションは「社会的、政治的、経済的視点」と題され、各地におけるスーフィー教団の社会的在り方が検討された。

Florian Schwarz 氏の報告は、*Thamarāt al-mashāyikh* という史料を用いて 17 世紀のブハラにおけるスーフィー教団について検討したものであった。当該史料には、ブハラの多くの建築物（マドラサ、モスク、ハーナカー、マザール、ランガル）が紹介されているといい、その分析からブハラの町に占めるスーフィー教団の規模等を描き出そうとするものであった。スーフィズムの研究にとって重要な史料であるとは思われたが、町とスーフィー教団の関係というテーマは、一史料のみに基づいて論じるべき問題ではないことは明らかであり、会場からも他史料との比較など、より詳細な分析が必要との意見が多く出された。

Allen Frank 氏の報告は、*Tārīkh-i Barangawī* という歴史書により、1850-1905 年のブハラ・アミール国におけるスーフィー・シャイフについて分析するものであった。本史料の著者は、現在はマリ自治共和国に属する小村のタタール人イマーム一族出身であり、自身もブハラに留学し、そこでスーフィーにも弟子入りした人物であるという。本史料は基本的には「Baranga 村の歴史」の体裁をとっているが、村のモスクと歴代イマームについて多く述べられており、それはすなわち著者自身および著者同様にブハラに学んだ父、おじの見聞録でもあるという。そのような記述から当該時期のブハラにおけるジャディードとスーフィズムの関係を描き出そうとした手法が会場から評価された。

Sugawara Jun（菅原純）氏の報告は、氏が発掘した 131 点のワクフ関連文書を整理し、その史料としての性格を明らかにし、20 世紀初頭のカシュガルに所在した聖者廟付属のワクフ地の規模と分布を探るものであった。当該分野に関する史料が多いとは言えない中での新史料の紹介は、会場から驚きをもって迎えられ、史料の具体的記述についての質問が多く寄

せられた。

Robert McChesney 氏の報告は、前近代アフガニスタンと中央アジアにおけるスーフィズムとワクフ、蓄財との関係を、「一族の間で保持すること」という切り口から包括的に述べるものであった。ある著名なスーフィーが築いた財をどのようにして一族の中で守り続けたかという問題を、史料に基づいて描き出していた。一人の息子が家に残って廟を維持管理し、他の息子がワクフ財を管理するために他の地域に移り住むという形で、地域的にも一族の影響力が拡大していく過程が具体的に示された。

全セッション終了後に Cook 氏の司会で総合討論が行われた。中央アジアといっても、その中で異なる地域、時代を対象にした個々の研究から、どのようにスーフィズムの歴史像を描けるのか、各報告にヒントを得ながら史料、手法について様々な意見が出された。この中で DeWeese 氏は、各報告者の研究成果はそれぞれ満足いくものであると評価し、しかしながら、手つかずの写本史料は多く残されているため、さらなる一次史料の研究が期待されると指摘した。また、Zaman 氏からは、スーフィズムが民族、国境、地域を超えて拡大することについてより関心が向けられるべきではなかろうかとのコメントが寄せられた。総合討論はこれら主催者からのコメントで締めくくられた。

以上、若干筆者の研究関心に偏る感想を交えた報告を述べたが、総じて、現在当該地域のスーフィズムについて研究している幅広い年齢層の研究者たちが最新の研究成果を提示し、得られた知見について情報交換を進めたと言えよう。とりわけ若手研究者たちの報告においては、現時点における研究の到達点と今後の進展のための問題点がよく議論されたように思う。

唯一残念に思われたのは、中央アジア現地の研究者が Muminov 氏を除いて参加していなかった点である。いくつかの研究において議論されていたように、スーフィズム史を考える上で、その現代社会における位置づけという問題は避けては通れないであろう。そのような問題を議論する上で、やはり現地の研究者の見解は必要であると思われる。

他方、本シンポジウムに出資した Poullada 一族が2日間を通じて熱心に議論に参加し、報告者一人一人に積極的に質問していた姿には驚かされた。日本においても民間財団による研究助成は数多く存在するが、助成を受ける研究者たちとこのような関わりを持つ例は見られないだろう。一日目の夕方には一族の招待で大学内の会館でディナーも振る舞われた。日米社会の学問に対する関わり方の違いにも触れることができた。

また、両日を通じて朝食と昼食が会場の外の廊下に用意され、参加者が気軽に議論を続けられる時間と招聘者側による宿泊費の負担軽減（参加者用のホテルは素泊まりプランであっ

た)の両方が実現していた。規模は決して大きくなかったが、全員が存分に議論に参加できる環境と雰囲気が維持されていたと感じられた。

なお、本シンポジウムの成果は論集として2013年に刊行される予定である。

プログラムは以下の通りである。

Day One (Friday, October 21):

Welcome and Introductions – Muhammad Qasim Zaman (Princeton University), Symposium Chair

Opening Address – Devin DeWeese (Indiana University), Symposium Co-Chair

Session I: Sources and Interpretative Strategies

Shahzad Bashir (Stanford University): “Genre, Narratives, Texts, and Manuscripts: A Heuristic for the Study of Central Asian Sufi Hagiography”

Jo-Ann Gross (The College of New Jersey): “The Biographical Tradition of Muḥammad Bashārā: Islamic Hagiography in Tajikistan”

Maria E. Subtelny (University of Toronto): “The Oeuvre of Ḥusayn Vā‘iz Kāshifī as a Source for the Study of Sufism in Early 16th-Century Central Asia”

Discussant: Jawid Mojaddedi (Rutgers University)

Session II: Sufi Communities and Sources: Realignments from the Russian to the Post-Soviet Period

Kawahara Yayoi (University of Tokyo): “Walī-khān’s *jihād* in Marghilan: A Consideration on a Makhdūmzāda Family in the Khanate of Khoqand”

Eren Tasar (Washington University in St. Louis): “Sufism on the Soviet Stage: Holy People and Places in Central Asia’s Socio-political Landscape after World War II”

Ashirbek Muminov (Institute of Oriental Studies, Academy of Sciences of Kazakhstan): “Sufi Groups in Contemporary Kazakhstan: Competition and Connections with Kazakh Islamic Society”

Discussant: Zvi Ben-Dor Benite (New York University)

First Day Concluding Remarks and General Discussion: Symposium Moderator, Jo-Ann Gross

Day Two (Saturday, October 22):

Session III: Sufi Communities: Social, Political, and Economic Perspectives

Florian Schwarz (Austrian Academy of Sciences): “The Sufi and the City: Sufi Communities in 17th-
Century Bukhara According to the *Thamarāt al-mashāyikh*”

Allen Frank (Takoma Park, Maryland) “The *Tārīkh-i Barangawī* as a Source on Sufi Shaykhs in the
Emirate of Bukhara, 1850-1905”

Sugawara Jun (Tokyo University of Foreign Studies): “*Mazārs* and Waqf Domains in Kāshghar: A
Preliminary Approach to their Dimensions and Distribution in the Early 20th Century”

Robert McChesney (New York University): “Keeping it in the Family: Sufi Shrines, Dynastic
Families, and the State in Early Modern Central Asia and Afghanistan”

Discussant: Dina Le Gall (Lehman College, City University of New York)

Second Day Concluding Remarks: Moderator, Jo-Ann Gross

Concluding Remarks and General Discussion: Michael Cook (Princeton University)

(人間文化研究機構研究員)